

大 博物館

NO. **40**
2003.10

津山郷土博物館

だより



▲ 顎部施文軒平瓦 津山市勅使遺跡出土 (津山郷土博物館蔵)

三重弧文の軒平瓦。瓦当部の左端部を欠損する。推定上弦幅265mm・推定弧深57mm、厚さ30mm。弧文は幅9mmで彫りは残い。顎は低い段顎である。顎面は幅14.6cmと広い。瓦当部と平瓦部の接合は、平瓦広端凸面に薄く粘土を貼って行く。凹面には細かい布の圧痕があり、瓦当縁から2.5cm程の部分に布の末端痕が認められる。桶巻作り技法に伴う幅34mmの杵板痕と第一次成形の際の糸切りの平行弧線がある。顎部の瓦当縁に沿って四重の平行凸帯文を施す。凸帯は半球状で幅は10~13cmである。顎面の内寄りには数条からなる波状文を二段にめぐらす。平瓦部にはナテ調整が施される。胎土は粗

い白色及び黒色砂粒を多く含み、白灰色で焼成は硬質である。英田郡美作町檜原廃寺軒平瓦と酷似する。美作の白鳳時代Ⅲ期(7世紀末ないし8世紀初め頃)に編年される。

勅使遺跡は津山市高野本郷の加茂川東岸の標高約110mの沖積地に立地する遺跡である。古代の苫田郡(のち苫郡)高野郷に位置する。小字勅使の一角に勅使山円福寺の小堂があり、付近から瓦などが出土する。発掘調査は実施されていないが、地形や地割りなどから、白鳳時代の寺院跡と推定される。地割りからみて、寺域は方1町程と想定され、先の小堂はほぼその中心に位置する。

1

池の内廃寺は岡山県英田郡美作町池の内の吉野川西岸段丘面上に立地する白鳳時代の遺跡である。1954年、瓦工場の採土作業中に、多数の布目瓦、須恵器、焼土などとともに2個体の軒丸瓦が出土した。石堂宗生の報文によると、一つは直径17cmで焼きが悪く赤味のある色をしており、他の一つは直径約16cmで灰色に堅く焼成されているという（石堂宗生『湯郷池の内から布目瓦が出た』『私たちの考古学1』考古学研究会、1954年）。報文の拓影によれば、両者は同範で直径の差は外縁幅の相違と思われる。現存する瓦は後者で、瓦当面はほぼ完存する。複弁六弁蓮華文で、範型の当て方が粗雑のため、本来の文様が著しく変形している。直径158～166mm、中房径56mm、内区径120mm、弁幅36mm、外区内縁幅13mm、同外縁幅7～12mm、瓦当部厚19mm。中房は凸形で大きく、蓮子は1+6+11である。蓮弁は中央に稜をもち、各弁に厚肉の子葉をおく。子葉は大小不揃いである。弁端は丸く若干隆起する。間弁も少し隆起し、基部は中房に達する。外区内縁は44個の小さな連珠文がめぐり、外縁は低く直立する。範型が瓦当部より小さく、外区外縁に段がついている。瓦当部と丸瓦部との接合粘土は上下に厚く、接合線は半楕円形を呈する。瓦当裏面は指頭圧痕が顕著である。胎土は粗い白色及び黒色砂粒を多く含み、灰色で焼成堅緻である。

本遺跡の性格について、報文では焼土などの存在から窯跡であることが示唆され、筆者もそれを踏襲したことがある（『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館、1992年）。ところが、1992年秋開催の当館特別展「美作の白鳳寺院」に出品中の上記軒丸瓦を観察した新宮町教育委員会の義則敏彦によって、それが播磨西部の複数の寺院跡出土軒丸瓦と同範であることが新たに確認された。それに伴い、本遺跡についても、新たな事実をふまえて再検討する必要が生じた。

2

さて、その後の調査も含めて、義則敏彦によって本遺跡と同範であることが確認された軒丸瓦（以下、「同範瓦」と呼ぶ）は、兵庫県龍野市神岡町・奥村廃寺、兵庫県揖保郡新宮町千本・栗栖廃寺、同新宮町市野保・越部廃寺、兵庫県佐用郡佐用町長尾・長尾廃寺の4遺跡である（義則敏彦『栗

栖廃寺』新宮町教育委員会、1994年）。奥村廃寺は揖保川東岸の丘陵裾に立地する寺院跡で、金堂を中心に東西に東塔と西塔、北に講堂が検出されている。寺域に南接して古代美作道が東西に通ると推定されている。創建は7世紀末頃で8世紀末頃に廃絶したと推定されている。寺院の檀越は揖保郡上岡里の在地首長と推定されている。「同範瓦」は、創建期より後出する8世紀初頭頃に編年され、かつ個体3点と少数であるので、補修用の瓦とみてよいだろう。（岸本道明・今里幾次『奥村廃寺一調査の概要と出土瓦の研究一』龍野市教育委員会、1997年）。

栗栖廃寺は栗栖川北岸の山麓に立地する寺院跡である。1992年の発掘調査により、礎積基壇が検出された。出土遺物は軒丸瓦（同範瓦）・丸瓦・平瓦・須恵器、それに1954年に出土した鬼瓦がある。時期は8世紀初頭頃に比定される。寺院の檀越は『播磨国風土記』に記す若倭部連氏と推定されている（義則敏彦他前掲報告書）。越部廃寺は揖保川西岸の段丘面上に立地する。現薬師堂に古代の礎石が転用されていること、および東西約12m・南北約10m・高さ約80cmのその土壇が塔基壇と推定されることから寺院跡と考えられる。1985年、薬師堂の南東側で発掘調査が実施されたが、小面積のためか、寺院跡の遺構は検出されなかった。出土遺物は須恵器・土師器・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦・埴仏などである。軒瓦は複弁蓮華文軒丸瓦と素文頸部突帯軒平瓦および複弁八弁軒丸瓦と四重弧文頸部突帯軒平瓦の二種類の組み合わせが想定されており、「同範瓦」はその前者の軒丸瓦である。時期は7世紀末頃と推定されている。檀越は『播磨国風土記』にみえる但馬君氏と推定されている。なお、遺跡の南約1kmに馬立の地名があり、『延喜式』に記す「越部駅家」に比定されている（『香山一縄文遺跡と古代寺院跡一』新宮町教育委員会、1987年）。

長尾廃寺は佐用川北岸の段丘面上に立地する寺院跡である。遺跡の南側を美作道が東西に通過していたと復元される。発掘調査により、金堂・講堂・塔・西面築地などが検出されている。伽藍配置は金堂を東、塔を西、講堂を北におく法隆寺式と考えられる。出土遺物は瓦・石帯・三彩・獣脚土器・鉄滓などである。軒瓦は軒丸瓦8種、軒平瓦13種が出土している。「同範瓦」は個体数は少ないが、時期的には最も溯るものであり、7世

紀末頃の年代が与えられている。佐用郡の郡司級在地首長の寺院と推定され、創建は7世紀末頃に10世紀後半頃以後廃絶したと推定される（藤木透「千草川流域の古代寺院」『古代寺院からみた播磨』第3回播磨考古学研究集会実行委員会、2002年）。義則敏彦によると、池の内遺跡を含む上記5遺跡出土の「同範瓦」の新旧関係は、範傷の進行からみて、奥村廃寺→栗栖廃寺→越部廃寺→長尾廃寺→池の内遺跡の順である。

3

以上のような事実をふまえて、池の内遺跡の性格とその意義について、改めて検討したい。第一に、出土瓦の年代であるが、筆者は旧稿において、この軒丸瓦を美作の白鳳時代軒瓦編年Ⅳ期（8世紀第1四半期頃）に編年した（『美作の白鳳寺院』前掲）。その根拠は瓦当文様が著しく粗雑であることから、これを藤原宮式の退化型式とみたことによる。しかし、「同範瓦」の存在によって、文様の粗雑さは、範型の当て方に起因するもので、本来の文様は整ったものであることが判明したので、先の根拠は効力を失った。そこで、他の「同範瓦」を含めて再検討すれば、今里幾次の指摘するように、「同範瓦」は蓮華文帯鴟尾の蓮華文と親近関係にあると理解される（今里幾次「新宮町香山廃寺の古瓦」『播磨古瓦の研究』1995年）。この蓮華文は鴟尾の縦帯に装飾される蓮華文様で、中房は凸形で小さく、蓮子は1+4+8である。蓮弁は複弁6弁で、外縁には面違い鋸歯文をめぐらす。この蓮華文は川原寺式軒丸瓦の影響を受けていると考えられるが、川原寺式の年代が天智朝（672~671）頃とすれば、蓮華文帯鴟尾の年代はそれにやや後出する7世紀第4四半期頃の年代が与えられる（大脇潔「古代寺院の造営と工人の移動—蓮華文帯鴟尾を中心として—」『文化財論叢』1983年）。「同範瓦」はその外区的面違い文を連珠文に置き換えたものであるため、「同範瓦」は蓮華文帯鴟尾にやや後出する7世紀末ないし8世紀初め頃とすべきであろう。よって、池の内遺跡「同範瓦」についても、一時期繰り上げて、美作の白鳳時代Ⅲ期（7世紀末ないし8世紀初め頃）と訂正したい。

第二に、遺跡の性格であるが、前述のように、従来は瓦窯跡と推定されてきた。しかし、その根拠は焼土の存在など間接的証拠にすぎず、必ずしも強くはない。むしろ、「同範瓦」の存在が明らかとなった現在では寺院跡とみなすべきであろう。播磨の「同範瓦」が姫路市峰相山窯跡群からの供給と推定されていることからすれば（今里幾次前掲論文）、播磨より後出する池の内遺跡「同範瓦」

も同窯跡群からの供給の可能性はある。ただし、範型の移動に伴う瓦窯跡を完全に否定することはできないが、遺跡の立地からみて、方1町程度の寺院跡が存在する可能性は十分ある。

4

第三に、遺跡の史的意義についてであるが、義則敏彦は「同範瓦」出土の5遺跡の造営を播磨国府から美作国府に至る美作道の設置を契機とする（義則敏彦他前掲報告書）。確かに、美作道の起点に近い奥村廃寺を嚆矢とし、栗栖廃寺→越部廃寺→長尾廃寺と美作道を東から西へ「同範瓦」が移動している。しかし、池の内遺跡は推定美作道（中村太一「山陽道美作支路の復元的研究」『歴史地理学』150号、1990年）の約4km南にあつて、それからややそれている。また、美作道の整備は美作分国の和銅6年（713）以後と考えられるが、前述のように、「同範瓦」はそれに先行する可能性が強い。ただし、7世紀第4四半期、律令制の成立に伴って、官道としての美作道に先行する初期美作道が整備され、そのことが美作分国の基礎となったと考えられる（狩野久「美作国の成立」『年報津山弥生の里』第6号、1999年）。しかし、初期美作道の整備は播磨・備前両国司の指揮のもとに、各国の郡（評）司が実務を担ったと考えられるが、「同範瓦」出土遺跡のうち、郡（評）司と関係する可能性があるのは長尾廃寺のみで、他は郡司以外の在地首長が檀越と考えられる。したがって、「同範瓦」の存在をただちに美作道の整備と結びつけることは困難と考える。

7世紀第4四半期頃から8世紀第1四半期頃にかけての美作と播磨の寺院跡は密接な関係にある。すなわち、一つは前述の蓮華文帯鴟尾の複弁6弁蓮華文が美作大海廃寺（英田郡作東町）と播磨伝伊勢村（姫路市）・下太田廃寺（姫路市）・中井廃寺（龍野市）と同範であることである（大脇潔前掲論文）。二つは美作大海廃寺細弁16弁蓮華文軒丸瓦が播磨長尾廃寺のそれと近似することである（今里幾次前掲論文）。三つは顎部に数条の凸帯を有する今里幾次編年第2種の顎部施文軒平瓦（今里幾次前掲論文）が美作大海廃寺・榎原廃寺（英田郡美作町）・勅使遺跡（津山市）と播磨越部廃寺・千本屋廃寺（宍粟郡山崎町）とで近似することである。これらのことは、寺院造営主体である、美作東部と播磨西部の在地首長層の経済的・文化的な交流を示している。池の内遺跡の造営もこのような交流関係の中で理解すべきであろう。

（湊 哲夫）

弥生土器をつくる

実施しました



▲野焼き風景(8月15日)

◆この歴史教室は弥生土器の作り方を復元しながら、弥生時代の技術や生活を学習する内容となっています。7月24・25日、8月15日の3日にわたって行われた教室には、小学5・6年生9名が参加しました。次に子供たちの感想文を紹介します。

★弥生土器を作り始める前までは、「どんなことをするんだろう。上手に作れるかなあ。」と思っていたけど、作り始めると、とても楽しくなって、時間が過ぎているのもわすれていました。大きいつぼが作れた時は、「やったあ。できた。」と心の中で喜びました。また、土笛を作っている時は、「どうやって音をふきかわけるのだろう。本当に音がなるのかなあ。」と思いました。そして、器台を作っているときは、下がくずれそうに心配でした。だけど、全部上手にできたので安心しました。焼いているときは、弥生土器が木みたいに焼けそうでした。来年もまたあったら、ぜひやってみたい。

(佐良山小5年 佐藤翔一君)

★一日しか作りにこなかったけど土器作りが楽しいけどたいへんなんだなと思いました。最初は重ねるだけと思っていたけど、作っていくうちにくずれそうになってしんばいでした。なんとか、くずれなくてできたけど、いっぱいデコボコがあったからちょっとかっこよくありませんでした。野焼きの日には、自分の器がよく見えなかったけどとても真っ黒になっている土器もありました。われているのもあったからドキドキしました。ほくは土器のことをしらなかったけど歴史教室にきて少し土器のことを勉強できました。

(岡山市野谷小5年 左居右気君)

★最初土器を見てかんたんそうに見えたけどおもっていたよりもむずかしかったです。先生がねん土はいっぱいあるから大きいのをつくろうと言ったので大きいものを作りました。ねん土をいっぱいつかいました。土器をつくってみてよかったなあと思いました。焼くとき火が熱くておねえさんに手伝ってもらいました。やよいしいたのときは、大変だったんだなあと思いました。昔とくらべて今は便利で食べ物にこまらないから昔はつらいおもいをしてきたんだなあと思いました。

(向陽小5年 関藤昌博君)

★最初に作り方を聞いて思っていた以上に、かんたんだなと思ったけど、実さいには、ねん土をこねるのがたいへんで、むずかしかったです。全部作ってみたら、変な形だったけど、ものすごく楽しくておもしろかったの、また行きたいと思いました。二日目に器台作りでほくにできるかなと思ったけど、先生がやさしく教えてくれました。三日目に、雨でえんきで残念だったけど、次の日にできてよかったと思いました。熱くて大変だったけど土器作りは、たのしいなあと思いました。

(清泉小5年 大谷真君)

★つくり方とか、そうどうしていたのとぜんぜんちがってむずかしかった。本物の「弥生土器」をさわったり、弥生時代のことわかってよかった。焼くのがあつくてあつくていやだったけど、つくるのはちょー楽しかった。ほかの学校の人と友達になれたしよかった。友達が休んで不安だったけど、新しい友達やいろんな人と話せてよかった。弥生時代のような昔でも、こんなものをつくって使っていたなんてびっくり!! またこんなのができるんだったら出てみたい! チョー楽しかった!!!

(東小5年 山下夏波さん)

★やよい時代のころの人の生活がたいへんだったということがわかった。今はねん土があるけど、むかしの人は土からねん土をとりだしていたので今の倍かかるんだ...と思った。なのに、すごくすくてかたちもキレイ。よくできたなあ。それに、土器はやくとじょうぶになるからしょっきとしても、つかわれるし、今でも土にうまって、きれいに出てくる。土器のできあいでも、時代いかわっているのがわかる。土器が見つかったからむかしのことが多くわかったと思う。土器はとてもたいせつな物だと思った。

(林田小6年 福井美幸さん)

★弥生土器は去年も作りに来たけどそのときより、大きいし良いのが作れた。土器の作り方は覚えていたけど、やっぱり粘土でひもを作るのが変になったりした。最初に作った入れ物は、下の方は、まあまあできたけど、上の方はなんかでこぼこになった。つぎの日に作った器台は上手にできた。三角の穴も一つあけてみた。作ったあと、こんな大きいのもうって持って帰ろうかとも思った。焼くとき、自分が作った土器がどれか忘れたけど見たらすくわかった。木も変わった。

(東小6年 上山夏生君)

★弥生土器を始めて作った。初めになにを作るのかきめていなかったので作るときにきめた。つぼを作った。最初はあまりなれてなかったけど、だんだんなれてきた。約2時間50分くらいでできた。土ぶえを作った。土ぶえは早くできた。器台はけっこうできた。器台はけっこうかかった。土器を作って見たらいいくらいにできた。

(河辺小6年 安東弘明君)

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
 - 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
 - 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
- ※()は30人以上の団体

大 博物館だより No.40 平成15年10月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下9-2
☎(0868)22-4567 ☒(0868)23-9874
E-mail: tsu-haku@tvf.ne.jp

印刷：(株)廣陽本社

大 は津山松平藩の楨印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。